



TITLE:

<論文>箱庭療法における見守り手の体験過程に関する予備的研究 -- 臨床家と非臨床家の違いも踏まえて--

AUTHOR(S):

木村, 大樹

CITATION:

木村, 大樹. <論文>箱庭療法における見守り手の体験過程に関する予備的研究 --臨床家と非臨床家の違いも踏まえて--. 京都大学大学院教育学研究科附属臨床教育実践研究センター紀要 2018, 21: 58-68

ISSUE DATE:

2018-03-29

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/230332>

RIGHT:

論文

箱庭療法における見守り手の体験過程に関する予備的研究

—臨床家と非臨床家の違いも踏まえて—

京都大学教育学研究科

博士後期課程 3 回生 木村 大 樹

A Preliminary Study on Therapist's Experiencing in Sandplay Therapy:
Focus on Difference between Clinicians and Non-Clinicians

KIMURA, Daiki

I 問題

1. 問題とリサーチクエスチョン

箱庭療法では、制作者は必ず見守り手の前で箱庭を制作することになっているが、見守り手は何をしているのであろうか。河合（1969）の「共に味わい楽しむような気持」、あるいは Kalff（1966）の「母子一体感」「自由にして保護された空間」という言葉がよく引用されるように、「どのように見守ればよいか」という見守る際の態度の指針は示されてきた。

また、箱庭の見方に関する基礎的研究もいくつかなされている。木村（1985）は、経験者群と初心者群に箱庭作品の写真を評定してもらった結果、「発展の可能性」「好悪」「感情、制作意図、問題の了解度」などにおいて、両群の間で統計的に有意な差を得ている。また、齋藤（1991）は同一制作者による二回の箱庭作品のマッチングにおいて、専門家が非専門家よりもわずかに得点が高いことを示した。野副（1997）は、実践経験 13 年以上の心理臨床家 10 名に不登校児 27 名の制作した箱庭作品計 224 個を呈示し、“展開点”あるいは“変化点”を選んでもらう調査を行っている。その結果、10 名中 5 名以上の臨床家が同一の作品を転換点として選んだ事例が 27 事例中 19 例に上るなど、かなりの程度で一致したことを報告している。これらの三つの研究は、見守り手の箱庭作品の見方の専門性の一端を示しているが、制作場面にいなかった臨床家が完成した箱庭作品の写真を評定、マッチングするという調査状況と、実際の箱庭療法における見守り体験とのギャップは大きい。

このような調査場面と実践場面ギャップを埋める「箱庭制作過程の研究」が近年増えている（千葉, 2015）。作り手の主観的体験を扱った研究が多いが、見守り手に関する研究もいくつか見られる。たとえば平松・池見・山口（1998）はジェンドリンの体験過程の理論に基づいて、箱庭療法面接の制作後の話し合いを評定する「箱庭療法面接のための体験過程スケール」を作成しており、このスケールは「作

り手用」とともに「面接者用」も作成されている（平松, 2001）。また、清水（2004）は箱庭制作過程における作り手、「立会人」（見守り手）、「非立会人」（その場にはおらず、箱庭制作のビデオを見た第三者）それぞれの主観的体験を記述し、「立会人」は「非立会人」に比べてコミットが自然に誘発され、作り手との相互作用も感じられたと報告している。なお、清水の研究の見守り手は臨床家ではない。中道（2010, pp. 126-164）はスーパーバイザーとスーパーバイジーという関係性のもとで箱庭制作の調査を行い、作り手と見守り手の関係性や作り手の主観的体験に焦点を当てて詳しく内的体験を記述している。大浦・佐々木（2017）は、初心臨床家3名、熟練臨床家3名を見守り手として、制作中における箱庭制作者の体験と見守り手の体験の相互作用について検討している。初心臨床家が見守りをした事例と熟練臨床家が見守りをした事例から、それぞれ特徴的であった一事例を比較し、動じない、背景化する、制作者のイメージを共有する、などの点が熟練臨床家に特徴的であったことを報告している。

このように、これまで箱庭療法における見守り手の重要性については指摘されているにもかかわらず、見守りの体験を記述した研究は現在のところ見当たらない。治療機序の探求だけでなく、専門性の説明責任や教育・訓練の観点からも、このような研究は必要であろう。そこで、本研究では箱庭制作過程において、臨床家はどのような見守り体験をしているのか、臨床家と非臨床家で見守り体験はどのように違うのか、の2点を調べることを目的とする予備的研究を行う。

2. 調査方法の検討

竹内（2011）が「専門家の身体的・手続き的な知識を形式化しようとする」と、結果として極めて一般的な事柄しか明らかにすることはできないということなのであり、専門家の技能というのは状況や環境に多様に相互作用を行いながら自らの技能を発揮している」と述べている通り、見守り手の体験過程を具体的な事例抜きに語ることは難しいと考えられる。そこで、本研究では実際に箱庭制作の見守りをしてもらった上でその見守り体験について語ってもらうこととした。インタビューの際に見守り体験をできるだけ詳しく語ってもらうため、本研究では「対人プロセス想起法（Interpersonal Process Recall; 以下 IPR 法）」という方法を用いた。IPR 法とは、録画したカウンセリングのセッションを、クライアントまたはセラピストと調査者が一緒に見ながら、半構造化面接をするという方法であり、プロセス研究でよく用いられている方法である。IPR 法は、意識に上ってはいるが、まだ語られていない体験に関して研究するのに適しているとされており（Larsen, Flesaker, & Stege, 2008）、見守り手の内的体験を詳細に調べるのに適すると考えられる。

II 目的

本研究は箱庭制作過程において、臨床家はどのような見守り体験をしているのか、臨床家と非臨床家で見守り体験はどのように違うのか、の2点を調べることを目的とする。

III 方法

1. 協力者

臨床家群の見守り手役の協力者（以下、単に「見守り手」と呼ぶ）は、臨床心理学系の大学院生3名

と臨床心理学に関する職に就く臨床家 1 名の計 4 名（全員女性）であった。臨床家群の見守り手の臨床経験は 1 か月～約 25 年、ケース内での箱庭見守り経験回数は 0 回～100 回以上であった。非臨床家群の協力者は、臨床実践の経験はないが箱庭に関する実習を受けた臨床心理学系の学部所属する大学生 3 名（男性：1 名、女性：2 名）であった。作り手役の協力者（以下、単に「作り手」と呼ぶ）は、授業で配布した調査協力者募集用紙によって調査協力を希望した大学生・大学院生 7 名（男性：3 名、女性：4 名）であった。見守り手と作り手を 2 人 1 組とし、7 ケース（臨床家群：4 ケース、非臨床家群：3 ケース）実施した（表 1）。

表 1. 協力者の情報

群	見守り手役							作り手役		
	記号	性別	臨床経験	実践での 箱庭見守り回数	実践以外での 箱庭見守り回数	臨床心理士の 資格	属性	記号	性別	属性
臨床家群	A	女	約25年	100回以上	約30回	有	臨床家	P	女	大学生
	B	女	4年	20～30回	1回	有	大学院生	Q	女	大学生
	C	女	1年	約20回	2, 3回	無	大学院生	R	女	大学生
	D	女	1ヶ月	0回	約20回	無	大学院生	S	男	大学生
非臨床家群	E	男	無	0回	2回	無	大学生	T	男	大学生
	F	女	無	0回	1回	無	大学生	U	女	大学生
	G	女	無	0回	1回	無	大学生	V	男	大学生

2. 調査の場所、用具・装置

調査はX大学の実習室にて行われた。用いた用具は箱庭用具一式（内側が水色に塗られた 57cm×72cm×7cm の箱、乾いた砂、玩具）、テーブル、椅子、ビデオカメラ、三脚、デジタルカメラ、ラップトップコンピューター、映像再生ソフト、IC レコーダー、臨床経験や箱庭見守り経験を尋ねる質問紙であった。

3. 調査の手続き

箱庭制作前 あらかじめ、見守り手に調査の目的、調査の内容、データの扱い方について説明し、同意を得た。見守り手への教示の内容は、箱庭制作の見守りをする事、面接過程をビデオに録画すること、完成した作品を写真に撮ること、制作終了後に作品を鑑賞しながら話し合う時間を設けること、その場で面接を収めること、これらすべてをおおよそ 50 分を目処に終わらせることであった。その後、見守り手は調査室に残り、調査者は別の場所で作り手と待ち合わせた。作り手にも調査の目的、調査の内容、データの取り扱い方について説明し、同意を得たうえで、作り手を調査室に案内した。

箱庭制作 はじめにお互いの自己紹介をし、見守り手が箱庭について短い説明をした後、作り手が箱庭制作を行った。制作後に作品をデジタルカメラで撮影し、作品を二人で鑑賞して話し合い、見守り手は作り手を調査室から送り出した。以上の箱庭制作の様子はビデオカメラで撮影された。これで作り手の調査を終了した。

制作終了後の見守り手へのインタビュー 調査者は調査室に戻り、見守り手に先ほどの見守り体験についてインタビューをした。インタビューは先ほど撮影した箱庭制作の映像を用いた IPR 法で行った。教示は「先ほどの映像を見ながら、この映像に映っている見守りの最中に考えていたこと、感じていた

ことを話してください。」であった。映像を見るだけになってしまわないよう、ときどき「この時は何を考えていましたか？」などと発話を促した。映像を最後まで見終わったら「今までのところで、まだ言っていないことや、付け加えたいことはありませんか？」と尋ねた。

さらに、先行研究（中道, 2010）から見守り手の体験を整理し、以下の8つの質問を行った。すなわち、「全体の進み方はどうでしたか？」、「テーマのようなものを感じましたか？」、「特に注目した場面や、箱庭で注目した個所はありましたか？」、「箱庭の一部あるいは全体が何かの比喻だと感じたり、そこから別の何かを連想したりしましたか？」、「何か作り手の意図や考え、感情は感じられた場面はありましたか？」、「箱庭を制作しているあいだ、二人の間で言語的・非言語的に何らかのやり取りはありましたか？」、「身体的な感覚を感じることはありましたか？」、「何か感情がわいてくることはありましたか？」であった。なお、すでにIPR法のインタビューで言い尽くされていると判断した質問は省略した。また、見守り中に考えていたことなのか、制作終了後の制作者との話し合いで考えたことやインタビュー中に思いついたことなのか不明確な場合は、明確化を促した。上記のインタビューは録音した。

4. 分析方法

インタビューのすべてのスクリプトのうち、見守り手が制作終了後の作り手との話し合いやインタビュー時に考えたこと、および単なる客観的説明のみの発話（「動物を足していった」など）は「見守り体験」ではないとみなし、それらを除いて本研究の目的に関係するもののみを抽出した。

分析はM-GTA（木下, 2003）を参考に進めた。臨床家群の分析対象データを読みこみ、似た体験について話しているものをまとめて概念名を付けていった。その際、似た概念に注目し、それらの間にどのような違いがあるかなどに注意しながら概念を定義していった。すべての体験がいずれかの概念に含まれるようにした。さらに、データに基づいて概念間に因果関係が認められるところは矢印で結んだ。最後に、それらの概念が箱庭に焦点を当てているのか、作り手に焦点を当てているのか、見守り手自身に焦点を当てているのかで、重複を許してカテゴリーに分けた。さらに、非臨床家群の分析対象データを上記分析で生成した概念と照らし合わせ、いずれかの概念に当てはまるかどうか考え、当てはまらない語りから新しい概念を生成した。

IV 結果

1. 調査結果の概要

箱庭制作、制作後の話し合いを含めた面接時間の平均は31分（範囲：16分～46分）、インタビュー時間の平均は39分（範囲：27分～57分）であった。

2. 分析結果

データを分析した結果、15個の概念が生成された。そのうち、臨床家群のみに見られた概念は4個であった（図1の網掛けなし）。また、非臨床家群のみに見られた概念は2個であった（図1のドットの網掛け）。残りの9つの概念（図中グレーの網掛け）は臨床家群および非臨床家群に共通する概念である。以下に概念図（図1）と15個の概念の概念名、定義、概念を構成する逐語データの例を示す。

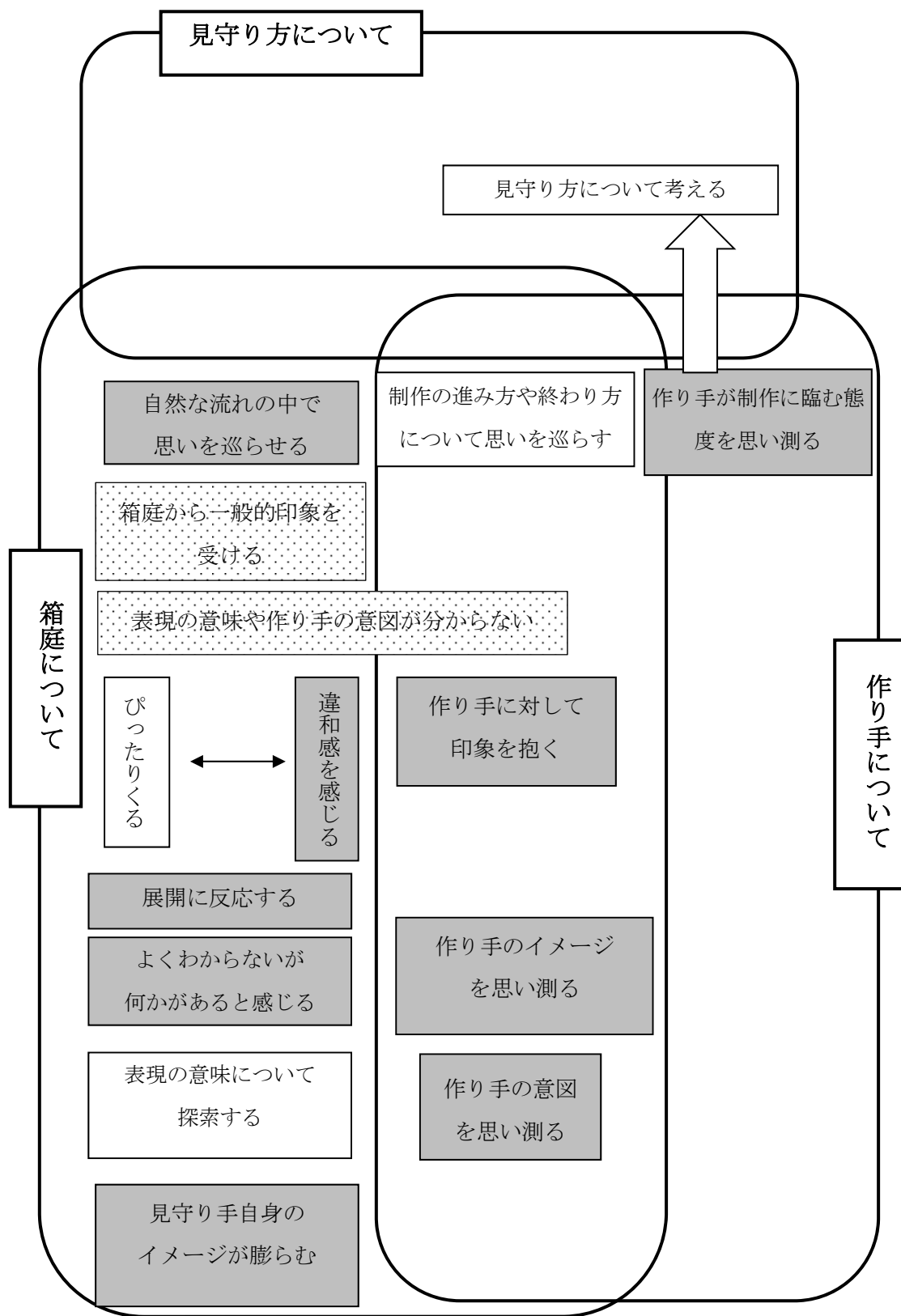


図 1. 結果の概念図

2.1 両群に共通して見られた概念

【作り手が制作に臨む態度を思い測る】ある場面における作り手の意図についてではなく、制作過程

全般における作り手の箱庭制作の仕方について考えること。例えば、意識的に置いているか、無意識が働いているか、楽しんでいるか、悩んでいるかなど。あくまで今回の箱庭制作に対する態度についてのみであり、作り手の人格について考えることは含まない。態度の変化を感じたり、その後の制作態度を予想したりすることも含まれる。

（協力者 A）あのへんからこの人の中の、もう少し・・・意識はもちろん働いてるんだけど、でも自分の中で起きてくるものにも身をゆだねながら、意識も働かせながら置き始めたなと思ったのそのあたりからです。

【見守り手自身のイメージが膨らむ】一つあるいは一連のミニチュアや箱庭のある領域、作品全体が、見守り手のイメージによって、ただの箱・砂・おもちゃ以上のものに感じられること。イメージを言語化するため、体験の語りは「～というか」や「なんか～みたいな」のようなあいまいな表現になることが多い。

（協力者 C）お墓だけ置かれてるときは、なんか寂しいような、なんかほんとに死っていうことが、私の中ではイメージとしてあったんですけど、でも神社が置かれたり、お花が置かれたりすることで、守りがある中の死なんだなというか、吊われてるような感じがして

【自然な流れの中で思いを巡らせる】違和感をもたずに次の展開を待つ、待ちながらイメージを膨らませる、この後の展開に期待する、頭の中でシミュレートすること。これらは無意識的になされている場合、インタビューでは語られないことになる。

（協力者 C）たぶん言葉にしてない時間は、待ってる時間だったり、次何置かれるかなあって待ってた、自分の中でイメージ広げてたりする時間だったり、後はよくわからない表現だったり。…（中略）…その時その時、一つずつアイテム置かれていくんですけど、それだけを見るんじゃなくて、その前に置かれたアイテムとの関連、イメージの繋がりとか、ふっと全体を見たときに湧いてくるものとか、それも感じたいなと思って。焦点を絞って一点を見ることの他に、視野を広げてイメージを膨らますというか、そういうことも一緒にしてたんだと思うんです。…（中略）…たぶん自分の中であんまり意識化できていなくて、見ているときには。どのポイントでこれを見ていて、どのポイントで全体のイメージを・・・全体に引いた視点で見ててっていうのが、あんまり明確には意識化できていなくて、動きつつっていう感じだったと思います。

【展開に反応する】一つあるいは一連のミニチュアに対して驚く、不思議に思う、印象的に感じることに。そこからさらに感覚を感じたり、イメージを膨らませることまでは含まず、単に驚くなど受動的で一時的な反応のみを含む。

（協力者 B）思っていたら、次これが出てきて「おお！」と思って（笑）「おお！」なんか像みたい・・・木の像みたい、なんか神様っぽい感じの（笑）「ほほお！」と思ったんですけど。びっくりしましたけどね。

【違和感を感じる】一つあるいは一連のミニチュアが見守り手自身にとって違和感がある、気になること。

(協力者 D) あとは建物がどれもしっかりこないところは、注目したっていうか違和感がありましたかね、見てても。

【よくわからないが何かあると感じる】一つあるいは一連のミニチュアや箱庭のある領域、作品全体に対しておもしろい、気になる、大切な気がする、ストーリーを感じる、などニュートラル～ポジティブな印象を受けること。そこからさらに表現の意味や作り手の意図を推測するところまでは含まない。

(協力者 C) このスペース (右上) がちょっとなんなのかなあんまりよくわかんなくて、最後まで、あんまりわかんなかったんで、そこにこの少女が置かれたのはなんか意味があるのかなーという気がしてて。家ですし、家の中も表現された上で、この女の子・・・で、彼女も女性なので、なんかここが気になってはいました。

【作り手の意図を思い測る】ある場面における、ミニチュアの選択や置く場所の選択、あるいはそれらの一連の行為の背後にある作り手の意図を推測すること。「意図」とは「作り手は『～は…だ』と考えたのだろう」という作り手の意識的な意図から、「(作り手本人も意識していないだろうけど) たぶん～なんだろう」という作り手の無意識的な意図までを含む。一つの場面における意図に限定された推測であり、制作態度全般の推測には含まない。箱庭自体あるいは箱庭制作の仕方から推測する。

(協力者 B) 割と端っこの方固めて置いていってたんで・・・なんか端を固めることで安心感っていうかそういうのが得られるのかなあって思ったりしつつ見守っていた

【作り手のイメージを思い測る】作り手のイメージを推測して自分もそのイメージを持つこと。作り手の制作の意図を推測しているのか、イメージを共有しているのかは区別しにくい。また、作り手のイメージを推測して共有しているのか、見守り手自身がイメージしているのかも明確に区別できない。

(協力者 B) あー、イルカかなんかだったかな？あんまり、まあ海っていう感じなんかなあと思ったんで、違和感なく見てましたけど。

【作り手に対して印象を持つ】箱庭の表現、あるいは制作態度や作り手の見た目・行動から作り手の特徴を感じるにとどまり、作り手の心理的問題や人格の全体像について考えることは含まない。

(協力者 C) なんかも結局ベッドの上にはなんにも置かれなかったんですけど、でもなんかこういうことができる方なんだなーと思いました。　　ちょっと統一感欠くじゃないですか。おうちの外・・・中のものが外に出てくる。あの一、中腰のお母さんもそうなんですけど、ちょっとそういう、なんていうか、ちょっとはずれたことと言うか・・・もあんまりこだわらず、気にせずできる方なのかなと。

2.2 臨床家群にみに見られた概念

【見守り方について考える】自分の見守り方について考えること。見守り方は、実際の立ち位置などの具体的なことから、調査という枠組みにおける見守り手のスタンス、収め方など抽象的なことまでを含む。序盤に見守り方の方針を決めることなども含む。

(協力者 A) 見守り手が少し視界に入っても、もうそれが邪魔にならない感じの置き方をしておられるようになったけど、別にいても・・・で逆にいることがこの人にとって置きやすくなるかもしれないなっていう風に感じたので、その時点で動きました。

【ぴったりくる】一つあるいは一連のミニチュアが見守り手自身にとって感覚的にぴったりくること。

(協力者 D) いや、やっぱり石の壺が出てきたところはすごいぴったりきましたね、「あ、いいなー」って思っ。

【表現の意味について探索する】一つあるいは一連のミニチュアや箱庭のある領域、作品全体の表現の象徴的意味について探索すること。仮説を立てるところまでは含まず、推測にとどまる、いくつかの選択肢を考えること。「イメージが膨らむ」のではなく、意識的に探索すること。

(協力者 D) あと駅を置いてるところが興味深いですね。建物の、唯一の建物の駅っていうのがどこでも行ける訳じゃないですか、これからね。ひとところにはいないっていうような。どこにいても逃げれるっちゃあ逃げれるし、まあ留まる場所でもあるし。どういう意味なんだろうっていうのを考えさせられるところかな。舟もそうですけどね。

【制作の進み方や終わり方について思いを巡らす】制作の進み具合について考えたり、その後の制作の終わり方を予想・期待すること。箱庭に焦点を当てれば箱庭のでき方について考えることになり、作り手に焦点を当てれば制作の進み方、終わり方について考えることになる。なお、この概念は協力者 D の語りのみから生成された。

(協力者 D) 葛藤じゃないけど・・・進み方。「進まん」って感じ、最後まで。

2.3 非臨床家群のみに見られた概念

【意味や意図がわからない】作り手の意図や表現の意味がわからず、不思議に思うこと。わからないまままで終わっていて、推測はしない。

(協力者 G) この病院と木とは何でかなって思っていました。

【箱庭から一般的印象を受ける】一つあるいは一連のミニチュアや箱庭のある領域、作品全体の表現から印象を受けること。作り手の意図やイメージではなく、あくまで作り手から切り離された、作品自体の印象である。また、イメージや感想ほど対象への積極性は見られない。

(協力者 G) 街の作りとかが、なんだろうなんか男の子っぽいついていうか、なんか鉄道とか車とかが、

という風には思いました。

V 考察

1. 結果のまとめと解釈

見守り手は、自身の見守り方に関して考えたり、作り手に関して印象を受けたりすることもあるが、主に箱庭について考えを巡らせていた。具体的には、箱庭のイメージを膨らませたり、箱庭表現の意味について探索したり、そこから作り手の意図やイメージを推測することが含まれる。あるいは単にぴったりくる、違和感を覚える、といった感覚となって感じられたり、「何かわからないが重要である」とだけ感じられることもある。制作がなかなか進まない場合は、その進み方について考えた見守り手もいた。さらに見守り手は、自然な流れの中で次の展開を待ちつつ、箱庭の展開に反応したり、違和感を感じたり、一つのミニチュアに驚いたりといった受動的な態度で見守るだけでなく、イメージを膨らませる、作り手の内面を推測する、といった箱庭や作り手にコミットする積極的な内的作業も行っていた。

次に非臨床家群との比較から、非臨床家群でも【作り手のイメージを思い測る】、【見守り手のイメージが膨らむ】といった能動的な内的作業が語られたが、それらのイメージの豊かさは臨床家群よりも乏しいという違いが見られた。また、【意味や意図がわからない】、【箱庭に一般的印象を受ける】の二つの体験は非臨床家群にしか見られず、逆に【表現の意味を探索する】は臨床家群のみで見られた。つまり、非臨床家群では、意図が分からないまま積極的に探索しようとせず、一般的印象を受けながらもそれが作品の象徴するものに結びつかなかったと言えるが、これは非臨床家群と臨床群のコミットメントの差であろう。さらに、【作り手が制作に臨む態度を思い測る】は非臨床家群でも見られたものの、非臨床家群ではそれに引き続いて【見守り方について考える】につながらなかった。なお、【ぴったりくる】や【箱庭の進み方や終わり方について思いを巡らす】に該当する体験が非臨床家群で見られなかったのは、作り手の特性によるものと思われるが、この点は今後検討が必要である。以上より、臨床家群の見守り方の専門性は「コミットメントの高さ」と「見守り方の自覚」としてまとめられると考えられる。

2. 中道（2010）との対照比較

以上の結果は調査場面での見守りに関する語りから得られたものであり、実際の心理療法場面と比べると、1) 心理的問題の解決のための箱庭制作ではない、2) 1回の箱庭制作のみを取り上げるため系列的理解ができない、3) 見守り手は作り手について何も知らず、見守り手と作り手との間には何らの関係性もない、などの違いがあった。

そこで、このうち3) 関係性の問題を部分的に解決した先行研究（中道, 2010, pp. 126-164）を手掛かりに、実践場面での見守りの記述を試みる。中道（2010）は自身が見守りをした砂のみの箱庭制作の3つの事例の記述において、見守り手の内観を報告している。これらを、本研究の結果と照らし合わせた結果、かなりの記述が本研究で生成した概念でカバーでき、本研究の結果が見守り手の体験過程を捉える枠組みとして一定の妥当性を有することが確認できた。

しかし、どの範疇にも当てはまらない新しい体験も見出された。まずは、イメージが箱庭だけでなく作り手に対しても広がっていた体験である（例：事例2「小さな流れを描くBが、小さな女の子のよう

に見えてくる』)。次に、箱庭表現から全く別のものを連想する体験も見られた（例：事例 2「面接者は B の箱庭に水の流れる音を感じ、ふと、京都法然院の白砂壇が浮かぶ」）。これらは中道（2010）では何度か見られたが、本調査のデータでは一度も見られなかった体験である。ただし、これらは見守り手と作り手の関係性が深まっているという要因のほか、見守り手の特性も関係していると考えられる。さらに、単に作品の象徴的意味を探索するだけでなく、作り手のパーソナリティとつながった深い意味を感じる体験も見られた（例：事例 2「B の中の大事な何かが確認されているのだろうと思う。そして、それらが全部つながっているのだろうという感じが起こってくる」）。【表現の意味について探索する】体験をさらに昇華したのがこの体験であると考えられる。これはまさに、見守り手が作り手をよく知り、作り手と関係性を築いていないとできない体験であろう。

また、定義上は本研究で生成した概念の範疇に含まれる体験であっても、今回の調査のデータとは明らかに質の異なる体験が見られた。たとえば、同じ【見守り手自身のイメージが膨らむ】体験であっても、身体感覚や生理的反応を伴う体験が見られた（例：事例 1「面接者は、大地からエネルギーが溢れ出し、地殻変動が起こっているように感じる。面接者の体温も上昇し、汗がにじんでくる。」。齋藤（2006）は「箱庭療法においてもまた、来談者とセラピストとが、箱庭というイメージ世界を歩き回り、身をもってその風景を生きていくと考えられる。そこでは、単に視覚的にその世界に入るだけではなく、あらゆる感覚を伴ってその風景を感じる事が前提になる。」と述べており、上記の中道（2010）の例とも符合する。

以上から、実践場面での見守りでは、今回の調査から記述された見守り方のほかに、少なくとも、作り手に対してイメージが膨らむ体験、箱庭から別の物を連想する体験、作り手のパーソナリティと関連した深い意味を感じる体験、などが加わるであろう。

3. 本研究の意義と限界

本研究で得られた結果は調査研究で得られたものであるため、どこまで実践場面に適用可能であるかは検討の余地がある。また、協力者数が少ないこと、見守り手役の協力者全員が X 大学にかかわっていること、4 人のうち 3 人が臨床経験 5 年以内であったことから、上記の結果は必ずしも箱庭療法を用いる臨床家一般の結果とは言えないであろう。さらに、IPR 法では、調査協力者が意識化できていない体験、思い出せなかった体験、何らかの理由で故意に語らなかった体験などは抽出できないため、本研究で得られた結果が見守り手の体験を網羅しているわけではないことには留意すべきである。

上記の限界点を抱えながらも、本研究は臨床家の箱庭療法の見守り体験を第三者が体系的にまとめた初めての研究であり、今後の見守り手の体験過程に関する研究の土台となることが期待される。作り手の箱庭制作過程の体験に関する研究はすでにある程度知見が積み上がっている（千葉, 2015）が、今後は見守り手の体験に関する研究も同様の観点から研究がなされ、両者の相互作用についても調べる価値があると思われる。また、臨床家と非臨床家の違いに関する研究、あるいは初心者から熟達者までどのように変化するのかに関する研究なども必要である。初学者の体験と臨床家の体験を埋めようとする探究の中で、「臨床の知」についても少しずつ明らかになるだろう。

謝 辞

本研究は平成 23 年度京都大学教育学部卒業論文を加筆修正したものである。論文作成に当たりご指導いただきました皆藤章教授、桑原知子教授、調査に御協力くださった 14 名の協力者の方にお礼申し上げます。

文 献

- 千葉友里香 (2015). 箱庭療法における作り手の変容機序について—我が国の箱庭研究の概観と展望. 京都大学大学院教育学研究科紀要, **61**, 135-147.
- 平松清志・池見 陽・山口茂嘉 (1998). 箱庭療法面接のための体験過程スケール作成の試み. 人間性心理学研究, **16**(1), 65-76.
- 平松清志 (2001). 箱庭療法のプロセス—学校教育臨床と基礎的研究. 金剛出版.
- Kalff, D. (1966). *Sandspiel*. Rascher Verlag. 河合隼雄 (監修) (1972) カルフ箱庭療法. 誠信書房.
- 河合隼雄 (1969). 箱庭療法入門. 誠信書房.
- 木下康仁 (2003). グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践—質的研究への誘い. 弘文堂.
- 木村晴子 (1985). 箱庭療法—基礎的研究と実践. 創元社.
- Larsen, D., Flesaker, K. & Stege, R. (2008). Qualitative interviewing using interpersonal process recall: Investigating internal experiences during professional-client conversations. *International Journal of Qualitative Methods*, **7**, 18-37.
- 中道泰子 (2010). 箱庭療法の心層—内的交流に迫る. 創元社.
- 野副紫をん (1997). 箱庭療法過程の見方に関する研究. 箱庭療法学研究, **10**(2), 27-37.
- 大浦みなみ・佐々木玲仁 (2017). 箱庭制作プロセスにおける制作者と見守り手の相互作用—制作者の内省と見守り手の語りの比較による探索的検討. 九州大学心理学研究：九州大学大学院人間環境学研究院紀要, **18**, 63-72.
- 齋藤 眞 (1991). 箱庭表現に対する心理療法家の系列的理解. 箱庭療法学研究, **9**(1), 45-54.
- 齋藤 眞 (2006). 箱庭療法における関係性についての臨床心理学的研究. 京都大学大学院教育学研究科博士論文 (未公刊) .
- 清水亜紀子 (2004) 箱庭制作場面への立会いの意義について—ビデオ記録を用いたプロセス研究の試み. 箱庭療法学研究, **17**(1), 33-49.
- 竹内一真 (2011). 専門家の技能に関する先行研究と現在の動向—ポスト正統的周辺参加論「教え手」の位相. 京都大学大学院教育学研究科紀要, **57**, 407-418.

ⁱ 協力者 D は臨床実践を始めてわずか 1 ヶ月、実践での箱庭見守り回数 0 回と、臨床経験はまだ浅いが、実践以外での見守りが 17 回であったこと、臨床心理学系の大学院生であったこと、インタビューデータの内容が他の臨床家群に近かったことから、臨床家群として扱うことにした。